

大学生の世界平和と異文化理解に対する意識とその影響要因

－宮城県の大学生の質問紙調査を通して－

黄 梅英*・呉 正培**・張 立波***

University Students' Awareness of World Peace and Cross-Cultural Understanding
and Its Influencing Factors

－ Through the questionnaire survey of university students in Miyagi Prefecture －

Huang Meiyong · Oh Jeongbae · Zhang Libo

本研究は、大学生の世界平和と異文化理解に対する意識とその影響要因を実証的に検討するものである。宮城県の大学生を対象とした質問紙調査の結果に基づき、まず学生の意識と関連する行動の現状、およびその両者の関係性を分析した。その結果、意識と行動に類似性を持ち、平和と異文化への日常的な関心度の低さと海外情報へのアクセス頻度の低さ、異文化への勉学意欲の高さと関連授業の積極的な履修が関連していることが確認できた。一方、意識と行動の間にギャップも存在し、特に平和を構築するための意欲と実践、異文化への勉学意欲と関連授業の履修の回答率に顕著な差（意識>行動）が認められた。意識の規定要因を検討するために重回帰分析を行った結果、大学生の世界平和と異文化理解への日常的関心度に異文化への勉学意欲が有意な影響力をもっている他、異文化・国際・グローバル関連授業の履修単位数、親の海外への関心度、海外ニュースへのアクセス頻度も有意な影響力をもっていることが明らかとなった。

キーワード：大学生の意識 世界平和 異文化理解 影響要因

1 はじめに

1.1 研究の社会的背景

平和な社会の構築がいかに重要かは、今日の国際状況と国内の現状から理解されやすい。世界に目を向ければ様々な対立や争いが起きてきたが、特にロシアのウクライナ侵攻により、身近な問題になってきた。他方、国内に目を向ければ、孤独やいじめによる自殺、またヘイトスピーチなどが少なくない。あらゆる争いを平和的に解決し、持続可能で安心な暮らしを実現することはグローバルな課題であり、特に若い世代にかかっている。身近にいる他者といかに共生できるかを考え、それを実践しながら、グローバルな視野をもち、世界平和に向けた意識の向上とアクションに努めることも不可欠である。

ユネスコ憲章の前文に「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸

2023年11月6日受理

*尚綱学院大学 総合人間科学系社会部門 教授

**尚綱学院大学 総合人間科学系人文部門 准教授

***山梨学院大学 グローバルラーニングセンター 特任准教授

人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信の為に、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった」（三田ユネスコ協会 n.d.）と述べられている。平和な社会を構築するには人々の相互理解が不可欠であるため、異文化理解教育が求められている。これからの大学教育は世界平和と異文化理解にどのように貢献できるかを検討することは急務である。そのため、まず現状を明らかにすることが必要である。

本研究は、宮城県を対象に現在の大学生の世界平和と異文化理解に対する意識の実態を明らかにし、学生の意識に影響する要因を検討することが主な目的である。

1.2 世界平和に関する意識の調査研究

世界の若者の平和に関する意識調査としては、五井平和財団が2016年から行ったものがあげられる。直近の2022年度の調査結果によれば、日本は自分にとって一番大切な平和について、「自然を含む地域の平和」と回答した者が40%を超え、一番多く（世界と同様）、その次が「世界人類の平和」となっている。しかし、「自分の心の平和」は世界の平均である27.3%に対して日本は10.5%で、「自分の家族の平和」は世界平均の4.0%に対して日本は11.7%と異なっている。また、自分の国がもっと平和になるために解決しなければならない最も重要な課題は「男女の不平等など、あらゆる差別や偏見をなくすこと」をあげている比率は30.1%で、最も高く、世界平均の15.1%の倍になっている。そして特に注目したいのは「平和について周りの人と話すことはありますか」という質問について、「よくある」と「時々ある」の合計は60.2%で世界の平均である79.6%より約20%少ない。逆に「ほとんどない」と答えたのは29.3%で世界の9.7%より約20%も多いのである。これより、平和に対する関心度は低いことが分かった。

また、広島平和研究所が長年実施してきた「学生平和意識調査」があり、「被爆経験の継承」「核兵器」に関連する内容が盛り込まれている。専門学校、短大、大学、大学院の学生を対象とした直近の2022年調査では、核兵器の存在について「いかなる場合でも認めない」と回答したのは73%で、平和に貢献する「行動をしている」と回答したのは34%で、2014年調査結果の12%より約20%も増えた（ヒロシマピースボイス 2022）。ロシアのウクライナ侵攻など国際情勢を「自分ごと」として捉えるようになったのではないかとよみとれる。

しかし、上述のような調査結果が示されているものの、具体的な要因分析までは至っていない。日本国内において、従来の反戦平和を目指す教育に関連する意識調査は特に小学生・中学生・高校生を対象とするもの（被爆や核兵器と関連した内容）が多い。一方、大学生の意識調査は、異文化理解がキーワードとなっているものがほとんどである。それはグローバル社会が進行している中、学士力として多文化・異文化学習が求められ、またOECDの研究によって、国際標準の学力として「異質な集団で交流する力」というキー・コンピテンシーも掲げているため、異文化教育をはじめ、人々の相互理解は欠かせないためである。

1.3 異文化理解に関する調査研究

まず、「異文化」の捉え方について、日本における異文化を捉える視点は国家レベルになっている。異文化は外国、日本は自文化という枠組みで捉えることが多いと指摘している政策的な研究（沼田 2009）があった。一方、坂根（2019）の実証研究（大学1年生対象の調査）の結果から、学生の大半が「異文化」と捉えているのは海外の文化や人々であることがわかった。「身近に存在する異文化」に気づいている学生はほんの一握りであったこと、しかも方言や食

べ物・味付けなど表面的に分かりやすいものばかりであることが示されている。

このような実態は政策と無関係ではないと考えられる。異文化と言えば外国という思考パターンにより、国内の異文化や多様性に鈍感となったり、同調（ステレオタイプの理解）が進行する土壌となったりするため、多様性の尊重や異文化によるトラブルの解消など、日常的に意識して取り組む経験は少なくなり、またそのような経験が重視されなくなると懸念される。

実際に日本の国内でも多様な文化的背景をもつ人々がおり、それぞれ様々な社会的問題に直面しているため、多文化共生に関する問題の理解を深める教育実践が重要であることから、沼田氏による国内の問題を取り入れた形での研究が注目される。例えば、日本人大学生の異文化理解に対する意識の調査研究（沼田潤 2010）の結果では、日本人大学生は個性を理解するために重要な多様な思考を受け入れる傾向がある一方、人をステレオタイプ的にみる傾向があり、人種差別を引き起こすことがあること、また他者に対して無関心であり、自己中心的に行動する傾向があること、さらに既存の社会を改革することに関心を示さず、他者の社会的問題を深く認識していないことが示されている。

また、「日本人大学生における異文化理解の現状」というテーマの研究（沼田 2012）では、「柔軟な価値観」、「少数派への関心」、「ステレオタイプの理解」、「自己の社会的立場の認知」という四つの因子が抽出された。そこで、「少数者への関心」は、「ステレオタイプの理解」と負の相関が認められた。つまり、少数者への関心をもつことで、物事に対するステレオタイプの理解が低減されることがよみとれる。

沼田氏のこれらの研究は一步大きな前進と言える。ただし、その「少数派への関心」の因子の中身はアイヌ民族、在日韓国・朝鮮人、障害のある人、沖縄米軍基地や沖縄の人々など、変数として社会的によく指摘され、比較的わかりやすいものに限定されている。少数派や多様性の捉え方自体はもっと広がりをもつ概念であり、日々直面している課題でもあるため、調査研究において少数派や異文化に対する捉え方を反映する設問をさらに工夫する必要があると考えられる。

1.4 本研究の狙い

本研究は上述の研究成果を踏まえ、「世界平和」と「異文化理解」に密接な関係があることから、現在の大学生の世界平和と異文化理解に対する意識の現状とそれに影響する要因を明らかにすることが主な目的である。それを通して、世界平和と異文化理解に大学教育における今後の課題が示唆できれば、平和な社会の構築に大学が確実に貢献していくことにつながるのではないかと考える。

具体的な分析課題として、まず第1に学生意識の現状について、戦争回避、多文化共生重視・対話重視など、国内も含む異文化理解の度合いを中心になどのようになっているのかを検討する。また、第2に平和な社会の構築や異文化理解の深化に関連する行動の現状も分析する。そのうえで第3に大学生の意識と行動の間になどのような関係があるのかを分析し、実態を探る。さらに、第4に大学生の意識に影響する要因として、学生本人の異文化に対する興味・関心、異文化に関わる経験・行動（異なる考え方もつ人・苦手な人への関わり方も含む）、大学教育の効果（国際・異文化・グローバル関連授業、外国語の教育など）、そして家庭的環境の影響も（親の関心、外海体験など）視野に入れて分析を行う。そのうえで、大学教育における今後の課題を検討する。

2 研究方法

2.1 調査の概要

本研究では、大学生の世界平和と異文化理解に対する意識を実証的に分析するために、質問紙調査を行った。調査票は、大きく「世界平和と異文化理解に関する意識」、「世界平和と異文化理解に関する行動」、「属性・環境」を尋ねる3つの部分で構成されている。意識については、平和の現状に対する認識、平和に対する認識、平和の構築に対する意欲、平和と異文化に対する興味・関心（日常的な関心度、異文化への勉強意欲、国際志向性）を尋ねた。行動に関しては、平和の構築に対する実践、海外情報へのアクセス、異文化の受容度（外国文化に触れる頻度、外国人との交流頻度、合わない人・苦手な人との接し方）、関連授業の履修・関連イベントへの参加、海外渡航経験について質問した。属性・環境については、性別、学年、所属大学、親の学歴、親の海外への関心などを尋ねた。平和の現状に対する認識、平和の構築に対する意欲と実践に関する質問項目は、村上（2020）をもとに作成した。

調査は2022年6～8月に宮城県にある7大学の学部生1850名を対象に実施し、1789名の回答を分析の対象とした（有効回収率96.7%）。調査の実施に先立ち、尚綱学院大学人間対象研究・調査の倫理委員会にて調査の内容・計画について承認を得ている。

2.2 有効回答者の内訳

有効回答者は、女性（51.4%）が男性（44.7%）よりやや多い（回答しない・無回答4%）。所属大学は、尚綱学院大学（32%）、東北大学（20.4%）、東北福祉大学（17.2%）、東北学院大学（12.5%）、東北文化学園大学（7%）、石巻専修大学（5.9%）、宮城学院女子大学（5%）で、私立大学が約8割を占めているが、宮城県の異なるタイプの大学を一定程度カバーしているといえる。学年は、1年生（36.3%）と2年生（37.6%）が多く、3年生（17.4%）と4年生（6.3%）が少ない分布となっていることに留意すべきである。

3 世界平和と異文化理解に関する意識（調査結果1）

3.1 平和の現状に対する認識

世界と日本は今平和だと思うかと思う理由を尋ねた。世界の平和の現状については、ほとんどの人（94%）が「平和ではない」と答えた。その理由（複数回答、N=1681）としては、「戦争中の国がある」（83.6%）が圧倒的に多く、「テロの継続的な危険と脅威がある」（24.4%）が次に多かった。長期化しているロシアとウクライナの戦争・対立など、昨今の国際情勢を反映している結果と言える。

日本の平和の現状については、回答者の約6割（59.9%）が「平和」、4割（40%）が「平和ではない」と答えた。平和だと思う理由（複数回答、N=1071）は、「安心して暮らせるから」（49.5%）が最も多く、「戦争がないから」（32.9%）が次に多かった。平和ではないと思う理由（複数回答、N=716）は、「時々犯罪があるから」（29.7%）、「様々な差別があるから」（27.2%）、「日本に脅威を及ぼす国があるから」（26.1%）の順であった。

以上の回答より、宮城県の大学生は平和の概念を狭く捉え、「平和＝戦争や紛争がなく、身の安全を確保できる状態」と認識している傾向がうかがえた。

3.2 平和に対する認識

平和に対する認識については、「外国人を個人として認識（違う国の人ではなく、1人の人間として接すべき）」、「日本の戦争に反対（日本は戦争をするべきではない）」、「抑止力より外交・会話（国家間の対立に抑止力より外交・会話の方が重要）」、「自国第一主義が問題」の4つの質問項目を用いて尋ねた。その結果、「日本の戦争に反対」と「外国人を個人として認識」は、「そう思う」という積極的な肯定の回答が7割を超えていた。「抑止力より外交・会話」は、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせた肯定の回答（84.2%）が8割を上回っていたが、そのうち「ややそう思う」（46.2%）という消極的な回答が過半数を占めた。「自国第一主義が問題」は、肯定の回答（56.3%）が否定の回答（43.6%）を若干上回っており、他の3項目に比べ、肯定の回答が少ない傾向にあった。以上の回答より、宮城県的大学生は「戦争や対立を避けるべき」という認識が高いことが確認できた。

3.3 平和の構築に対する意欲

平和な世界をつくっていくためにしてみたいことを尋ねた（複数回答）。その結果、「貧しい国への援助」（42.2%）、「自然保護に協力」（37.7%）、「被災国への支援」（37.5%）の回答率が高かった。続いて、「関連イベント・セミナーに参加」（23.8%）、「関連課外活動に参加」（20%）、「開発途上国の現場を見る」（17.5%）、「平和の大切さを訴える」（16.3%）、「反戦運動に参加」（7.5%）の順であった。

3.4 平和と異文化に対する興味・関心

(1) 日常的な関心度

普段から世界平和と異文化理解について考えているかを尋ねた。その結果、「当てはまる」（57.5%）という肯定の回答が「当てはまらない」（41.7%）という否定の回答を上回っていたが、「やや当てはまる」（49.5%）という消極的な肯定が多かった。これより、日頃から平和と異文化を意識して生活している人がより多いものの、その日常的な関心度はそれほど高くはないことがわかった。

(2) 異文化への勉強意欲

他国や異文化についてよく勉強したいと思うかを尋ねた。その結果、「そう思う」が27.6%、「ややそう思う」が47.7%で、肯定の回答（75.3%）がかなり多く、異文化に対する興味・関心の高さが示された。

(3) 国際志向性

国際志向性については、外国語学習が好きか、海外留学への関心度、国際的な仕事への関心度を尋ねた。その結果、外国語学習が好きと答えた人は約6割（59.1%）を占めていた。海外留学に関心を持っている人は55.8%であり、国際的な仕事に関心を持っている人は51.8%であった。海外留学、国際的な仕事ともに、関心の程度は「少し」（留学37.5%、仕事37.8%）が「とても」（留学18.3%、仕事14%）を大きく上回っていた。以上の回答より、回答者の過半数が外国語学習、海外留学、国際的な仕事に関心を示しているものの、その国際志向性はそれほど積極的なものではないことがわかった。

3.5 まとめ

平和の現状及び平和に対する認識の回答より、宮城県の大学生は「平和＝戦争や紛争がなく、身の安全を確保できる状態」と平和の概念を限定的に捉えており、「戦争や対立を避けるべき」という認識が高いことが明らかになった。平和と異文化に対する興味・関心については、日頃から平和と異文化を意識して生活している人、外国語学習、海外留学、国際的な仕事に関心を持っている人が過半数を占めていたが、そのような日常的な関心度及び国際志向性はそれほど積極的なものではないことが明らかになった。一方、他国や異文化について学びたいという勉強意欲はかなり高いことが確認できた。

4 世界平和と異文化理解に関する行動（調査結果 2）

4.1 平和の構築に対する実践

平和な世界をつくっていくためにしていることを尋ねた（複数回答）。その結果、回答率が最も高かったのは「自然保護に協力」（23.5%）で、次が「貧しい国への援助」（10.6%）、「被災国への支援」（9.7%）であった。続いて、「平和の大切さを訴える」（6.8%）、「関連イベント・セミナーに参加」（6.4%）、「関連課外活動に参加」（3.4%）、「開発途上国の現場を見る」（2%）、「反戦運動に参加」（1.3%）の順であった。「自然保護に協力」と「貧しい国への援助」以外の活動はすべて回答率が10%を下回っており、平和を構築するための実践が乏しいという現状が浮き彫りになった。

4.2 海外情報へのアクセス

海外のニュース等へのアクセス状況を尋ねたところ、ほとんどの人（90.4%）がチェックしていると回答した。頻度別には、「たまに」（67.2%）が非常に多く、「よく」が18.3%、「毎日」が4.9%となっており、アクセス頻度はそれほど高くないことがわかった。また、海外情報の収集ルートを探ねたところ（複数回答）、ほとんどの人がSNS（84.1%）を挙げ、多くの人が新聞・テレビ（61.8%）と回答した。授業は20.1%、図書は3.3%の回答率を示していた。以上の回答より、宮城県の大学生は、ほとんどの人が主にSNSとマスメディアを通じて海外情報に触れているものの、たまにチェックしている程度であり、持続的なアクセスには至っていないことが確認できた。

4.3 異文化の受容度

異文化の受容度については、外国文化（音楽、映画、ドラマ、食文化等）に触れる頻度、外国人（教員、留学生、友人、SNSでの知り合い等）との交流頻度、合わない人・苦手な人との接し方を尋ねた。その結果、ほとんどの人（95.7%）が普段外国の文化に触れており、回答者の約75%がかなりの頻度（「時々」44%、「ほぼ毎日」30.1%）で楽しんでいた。普段外国人と交流している人は半分程度（53.1%）であり、その頻度（「時々」18.2%、「ほぼ毎日」7.2%）は外国文化に比べ、低かった。考え方が合わない人・苦手な人に対して、普通に接する人（57.9%）が最も多く、あえて知ろうとする人（11.3%）をあわせると、約70%に上っていた。以上の回答より、宮城県の大学生は日常的に外国文化を楽しんでいる人が多く、異なる背景を持つ相手との交流も積極的とはいえないが、拒まず受け入れていることがうかがえた。

4.4 関連授業の履修・関連イベントへの参加

関連授業の履修については、外国語の授業と異文化・国際・グローバル関連授業の履修単位を尋ねた。関連イベントへの参加については、異文化・国際・グローバル関連イベントへの参加経験の有無を尋ねた。その結果、ほとんどの回答者（95.6%）が外国語の授業を履修しており、4単位以上を履修した人（55.7%）は半分を超えていた。一方、異文化・国際・グローバル関連授業の場合、履修者（60.4%）は約6割程度で、4単位以上を履修した人は23%にとどまっていた。さらに、異文化・国際・グローバル関連イベントに参加したことがある人（21.9%）は、約2割程度であった。以上の回答より、宮城県の大学生は外国語の授業に比べ、異文化・国際・グローバル関連授業の履修者及び履修単位が少なく、異文化・国際・グローバル関連イベントへの参加者も少ないことがわかった。

4.5 海外渡航経験

海外渡航経験の有無と回数を尋ねたところ、海外に行ったことがある人は約3割（27.1%）で、回数別には「1回」が14.9%、「2回」が5.7%、「3回以上」が6.5%の分布を示していた。さらに渡航経験者にその目的を尋ねたところ（複数回答、N=486）、旅行（69.5%）が圧倒的に多く、海外研修・実習（26.4%）、留学（10.9%）の順であった。以上の回答より、宮城県の大学生は海外渡航を経験している人がそれほど多くなく、その経験も短期的なものにとどまっていることが確認できた。

4.6 まとめ

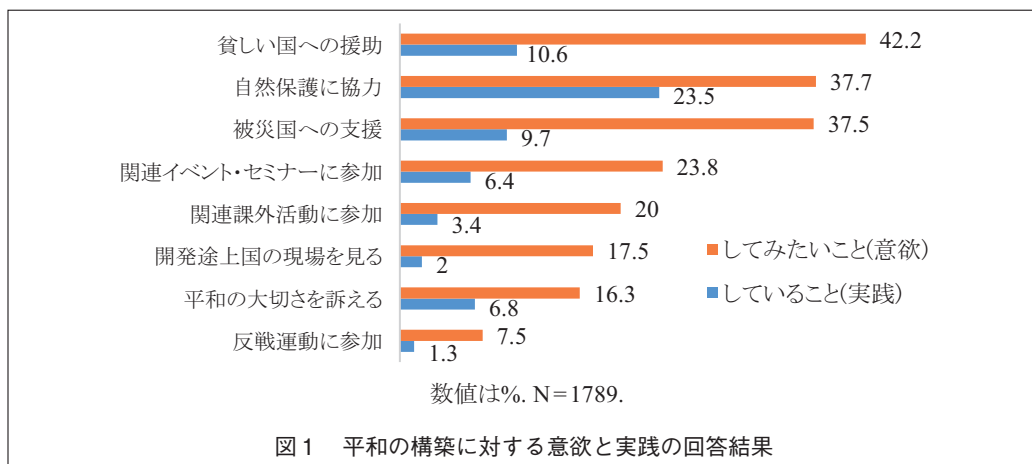
宮城県の大学生は、平和を構築するための実践が乏しいという現状が浮き彫りになった。ほとんどの人が主にSNSとマスメディアから海外情報に触れており、たまにチェックしている程度で、持続的なアクセスには至っていないことも明らかになった。異文化への受容度については、日常的に外国文化を楽しんでいる人が多く、異なる背景を持つ相手との交流も積極的ではないが、拒まず受け入れていることがわかった。また、外国語の授業に比べ、異文化・国際・グローバル関連授業の履修が少なく、関連イベントへの参加者も少ないことが示された。さらに海外経験に乏しく、その経験も短期的なものであることが確認できた。

5 世界平和と異文化理解に関する意識と行動の比較（調査結果3）

5.1 平和の構築に対する意欲と実践

平和な世界をつくっていくために、してみたいこと（意欲）と、していること（実践）の回答結果を図1に示す。

してみたいこと（意欲）、していること（実践）ともに、「貧しい国への援助」、「自然保護に協力」、「被災国への支援」の回答率が他の項目より高かった。宮城県の大学生はこの3つの活動への注目度が高く、実際に他の活動より参加していることがわかる。一方、各活動の意欲と実践の回答率に大きな差がみられ、意識と行動の間に大きなギャップが存在することが確認できた。



5.2 日常的な関心度と海外情報へのアクセス

平和と異文化に対する日常的な関心度（意識）と海外情報へのアクセス頻度（行動）の回答結果を表1に示す。

表1 平和と異文化への日常的な関心度と海外情報へのアクセス頻度の回答結果

平和と異文化に対する日常的な関心度（意識） = 普段世界平和と異文化理解について考えている		海外情報へのアクセス頻度（行動）	
「とても当てはまる」	8.0%	「毎日チェックしている」	4.9%
「やや当てはまる」	49.5%	「よくチェックしている」	18.3%
「あまり当てはまらない」	36.6%	「たまにチェックしている」	67.2%
「全く当てはまらない」	5.1%	「全く関心を持っていない」	9.4%
「無回答」	0.8%	「無回答」	0.2%

N=1789.

平和と異文化に対する日常的な関心度の回答では、日頃から平和と異文化を意識している人（「当てはまる」）が意識しない人（「当てはまらない」）より多かった。しかし、「やや当てはまる」が約半数を占めていることから、意識する度合いはそれほど高くはないといえる。

海外情報へのアクセス頻度の回答においても似たような傾向がうかがえた。つまり、ほとんどの回答者が海外情報にアクセスしているが、「たまにチェックしている」が圧倒的に多く、アクセス頻度はそれほど高くはないと言える。以上のことから、平和と異文化に対する日常的な関心度（意識）と海外情報へのアクセス頻度（行動）の回答傾向が類似していることがわかった。両者の相関を求めたところ、有意な正の相関が認められた（Pearsonの相関係数 $r=0.352$, $p < 0.001$, $N=1773$ ）。平和と異文化を日常的に意識する度合いが低く、それが海外情報にアクセスする頻度の低さにつながる可能性、あるいは海外情報にアクセスする頻度の低さが平和と異文化を日常的に意識する度合いの低さにつながる可能性を示唆する結果といえる。

5.3 異文化への勉学意欲と関連授業の履修及び関連イベントへの参加

異文化への勉学意欲（意識）と関連授業の履修及び関連イベントへの参加（行動）の回答結果を表2に示す。

表2 異文化への勉学意欲と関連授業履修及び関連イベント参加の回答結果

異文化への勉学意欲（意識） =他国や異文化を勉強したい		異文化・国際・グローバル 関連授業の履修（行動）		異文化・国際・グローバル 関連イベントへの参加（行動）	
「そう思う」	27.6%	「8単位以上」	6.0%	「ある」	21.9%
「ややそう思う」	47.7%	「4-6単位」	17.0%	「ない」	77.8%
「あまりそう思わない」	20.6%	「2単位」	37.4%	「無回答」	0.3%
「そう思わない」	4.0%	「履修していない」	39.4%		
「無回答」	0.2%	「無回答」	0.2%		

N=1789.

異文化への勉学意欲を持っている人が約75%であるのに対し、関連授業を履修した人は約60%、関連イベントに参加した人は約20%であった。これより、学びたいという意識と関連授業の履修及び関連イベントへの参加という行動の間にギャップが存在していることがわかった。一方、勉学意欲の高い人（27.6%）、4単位以上の関連授業履修者（23%）、関連イベントへの参加者（21.9%）の割合が似ており、意識と行動の回答傾向が類似していた。異文化への勉学意欲と関連授業の履修単位（ $r=0.286$, $p<0.001$, $N=1784$ ）、異文化への勉学意欲と関連イベントの参加有無（ $r=0.254$, $p<0.001$, $N=1781$ ）の相関を求めたところ、それぞれ有意な正の相関が認められた。異文化への勉学意欲の高さが関連授業の履修及び関連イベントへの参加を促す可能性、あるいは関連授業の履修及び関連イベントへの参加が異文化への勉学意欲を生み出す可能性を示唆する結果と言える。

5.4 国際志向性と海外渡航経験

海外留学への関心度（意識）と海外留学経験（行動）の回答結果を表3に示す。

表3 国際志向性と海外渡航経験の回答結果

海外留学への関心度（意識） =海外留学への関心はあるか		海外留学経験（行動）	
「とても関心がある」	18.3%	「ある」	3.0%
「少し関心がある」	37.5%	「ない」	97.0%
「あまり関心がない」	26.3%	「無回答」	0.1%
「全く関心がない」	17.9%		
「無回答」	0.1%		

N=1789.

海外留学に関心を持っている人が約56%、特に関心の高い人が約18%であるのに対し、実際に海外留学を経験した人は3%に過ぎなかった。海外留学への関心という意識とその実現という行動の間には大きな隔たりが存在することを示している結果と言える。

5.5 まとめ

宮城県大学生の平和と異文化に対する意識と行動の実態を比較分析した結果、次の2つの傾向がみられた。1つ目は意識と行動が類似していることである、平和と異文化への日常的な関心度の低さと海外情報へのアクセス頻度の低さ、異文化への勉学意欲の高さと関連授業の履修及び関連イベントへの参加経験がお互いに関連していることが確認できた。平和と異文化に対する消極的な関心と消極的な行動、積極的な関心と積極的な行動が結びついていることが示さ

れた。2つ目は意識と行動の間にギャップが存在していることである。平和を構築するための意欲と実践、異文化への勉学意欲と関連授業の履修及び関連イベントへの参加、海外留学への関心と海外留学経験の回答率において顕著な差（意識>行動）が認められた。必ずしも意識が行動を促し、行動が意識を生み出すとは限らないこと、意識と行動のつながりには両者の質的な要素が関わっている可能性を示唆する結果と言える。

6 世界平和と異文化に対する意識への影響要因

上述の分析を通して、大学生の世界平和や異文化に対する意識とその関連する行動の実態が明らかとなり、また意識と行動の間の類似性とズレから意識に対する再認識も可能となった。このような学生の意識はどのような要因に影響されているのか。以下はこれについて検討する。

6.1 世界平和と異文化理解への日常的関心度の規定要因

まず、大学生の世界平和と異文化理解への日常的関心度はどのような規定要因があるのかを検討するために重回帰分析を行った。表4はその分析の結果をまとめたものである。

表4に示したように、モデル1は世界平和と異文化理解に対する日常的関心度について、考えられる影響要因の変数として、学生本人の関心と親の関心、および異文化の学習行動である「異文化・国際・グローバル」関連授業の履修単位数と外国語の履修単位数、および違いに対する受容度を投入したものである。本人の異文化への勉学意欲と親の海外への関心度が有意な影響力をもっている。それと同時に、大学の異文化関連授業の履修単位数も有意な説明力をもっていることが示めされた。

表4 世界平和と異文化理解への日常的関心度の規定要因に関する重回帰分析の結果

独立変数	従属変数		
	世界平和と異文化理解に対する日常的関心度		
	モデル1	モデル2	モデル3
(N)	1713	1710	1712
定数	0.791	0.692	0.542
	B	B	B
異文化への勉学意欲の高さ	0.363***	0.349***	0.327***
考え方が異なる人・苦手な人への受容度	0.053	0.052*	0.046
親の海外への関心度	0.093***	0.080***	0.064***
国際的な仕事への関心度	0.055*	0.027	
外国語の授業の履修単位数	0.012	0.009	
「異文化・国際・グローバル」関連授業の履修単位数	0.097***	0.079***	0.08***
「異文化・国際・グローバル」関連イベントの参加有無		0.067	0.051
外国の文化を楽しんでいる度合い		0.043	0.036
外国人と話したり交流したりしている頻度		0.046*	0.036
海外のニュースなどへのアクセス頻度			0.189***
R ² 乗	(0.309)	(0.315)	(0.338)
F値	(127.982)	(87.359)	(110.618)
F値検定	***	***	***

注：*5%、**1%、***0.1%で有意。

モデル2は授業以外の本人の異文化関連の活動や体験に関する変数を投入したものであるが、その分析結果からモデル1と違っているのは、国際的な仕事への関心度の（弱い）有意性が消え、（日本人を含む）考え方が異なる人や苦手な人への受容度、外国人との交流の頻度は正の説明力をもつことが示された。つまり、国際的な仕事への関心度が同じであれば、本人の活動や経験の方が有意な影響力をもっている。

特に注目したいのは、外国人のみならず身近にいる異なる考えをもつ者に対するオープンな姿勢や受け入れの心構えは世界平和と異文化理解への関心に影響を及ぼしていることである。

モデル3には「海外のニュースなどへのアクセス頻度」という独立変数を追加投入したものである。周知のように、この行動は学生本人の海外への関心によるものであり、また大学の授業で国際社会に関連するニュースなどを扱っていること、課題として課されたことなどに由来することも考えられる。モデル3では、他の変数のレベルが同じである場合、「海外のニュースなどへのアクセス頻度」が有意な説明力をもつことが新たに示された。

また、モデル1、モデル2と同様、「親の海外への関心度」は一貫して強い説明力をもっている。本調査では家庭的環境について、親や親族の中に海外に半年以上滞在する経験をもつ方や海外とのビジネスに携わる方の有無に関する質問も設けたが、有義な説明力は確認できなかった（数が少ないことによるかもしれない）。「親の海外への関心度」で確認された有義な説明力は、家庭環境の影響を示しており、文化的再生産として重要な示唆を与えている結果といえる。また、「異文化・国際・グローバル」関連授業の履修単位数は規定要因として一貫して有義な説明力をもっている。それは現在行われている関連授業は全体として一定の教育効果をもっていることを意味し、今後も平和な社会や異文化理解に関する大学教育が必要であることを示している。

さらに、異文化への勉学の意欲も一貫して有義な説明力をもち、また係数からその異文化への勉学意欲の高さは世界平和と異文化理解の日常的関心度に最も説明力の強い変数であることが分かった。

では異文化への勉学意欲はどのように要因に左右されるのか。これについて次に分析したい。

6.2 異文化への勉学意欲の規定要因

異文化への勉学意欲はどのような要因に規定されているのかを検討するために重回帰分析を行った。表5はその分析の結果をまとめたものである。

表5に示したように、モデル2に異文化に関わる行動と親の海外への関心度の変数を加えたものであるが、それをみれば、「考え方が異なる人・苦手な人への受容度」は弱いながら説明力をもつが、「外国人を個人として認識する度合い」、いわば脱ステレオタイプの関連変数をはじめ、異文化への興味・関心や異文化に関わる経験・行動の変数は有意な説明力をもち、「親の海外への関心度」も異文化への勉学意欲に影響をもつ結果が示されている。

注目したいのは「外国語授業の履修単位数」の異文化勉学意欲へのプラスの効果が確認できず、「外国語が好き」が有意性を有していることである。外国語の学習を通して異文化にもっと興味をもてるようになることが期待されているが、外国語の履修単位数より、外国語が好きになるような教育方法がより重要であることが示唆されている。

モデル3は「海外のニュースなどへのアクセス頻度」を独立変数として加えたものである。表に示したように、その変数の説明力は有意であるが、「親の海外への関心度」の有義性は弱

表5 異文化への勉学意欲の規定要因に関する重回帰分析の結果

独立変数	従属変数		
	異文化への勉学意欲の高さ		
	モデル 1	モデル 2	モデル 3
(N)	1769	1721	1720
定数	0.671	0.381	0.703
	B	B	B
外国人を個人として認識する度合い	0.15***	0.119***	0.127***
考え方が異なる人、苦手な人への受容度	0.048*	0.055*	0.047
海外留学への関心度	0.151***	0.133***	0.147***
国際的な仕事への関心度	0.212***	0.205***	0.182***
外国の文化を楽しんでいる度合い	0.166***	0.155***	0.139***
外国語が好き	0.190***	0.179***	0.165***
外国人と話したり交流したりしている頻度	0.024		
外国語授業の履修単位数		0.014	0.010
異文化関連イベントの参加有無		0.158***	0.134***
親の海外への関心度		0.047***	0.066*
海外のニュースなどへのアクセス頻度			0.175***
R ² 乗	(0.367)	(0.382)	(0.399)
F値	(146.392)	(118.449)	(113.954)
F値検定	***	***	***

注：*5%、**1%、***0.1%で有意。

くなった。つまり、異文化への勉学意欲に対して、家庭的な環境も影響があるが、本人の海外情報へのアクセス経験・行動の方がより強い説明力をもつことを示している。

6.3 まとめ

以上の分析から、大学生の世界平和と異文化理解への日常的関心度に、異文化への勉学の意欲と、その意欲の現れである海外情報へのアクセス頻度、異文化関連授業の履修単位数、そして家庭環境である親の海外への関心度が影響していることが明らかとなり、特に異文化への勉学意欲は有力な影響力をもっていることが示された。また、異文化への勉学意欲には、国際的な仕事や海外留学などの国際的志向、また海外ニュースへのアクセス、外国文化との接触、異文化関連イベントの参加などの具体的行動、そして脱ステレオタイプという「外国人を個人として認識する度合い」に影響されていることが明らかとなり、大きな意味をもつ結果が示された。

7 結果のまとめと考察

7.1 結果のまとめ

本研究では、宮城県の大学生を対象に質問紙調査を行い、下記のような結果を得ることができた。

大学生は「平和＝戦争や紛争がなく、身の安全を確保できる状態」と平和の概念を限定的に捉えており、「戦争や対立を避けるべき」という認識が高いことが明らかになった。平和と異文化に対する興味・関心については、大半の学生が日頃から平和と異文化を意識して生活を送っており、外国語学習、海外留学、国際的な仕事に関心を持っているが、そのような日常的な関心度及び国際志向性はそれほど積極的なものではないことが明らかになった。一方、他国や異文化について学びたいという勉学意欲はかなり高いことが確認できた。

このような大学生の意識に対して、大学生は平和を構築するための実践活動は欠如していることが見受けられる。ほとんどの学生が主に SNS とマスメディアから海外情報に触れており、たまにチェックしている程度で、持続的なアクセスには至っていないことも明らかになった。異文化の受容度については、日常的に外国文化を楽しんでいる人が多く、異なるバックグラウンドを持つ相手との交流も積極的ではないが、拒まず受け入れていることがわかった。また、異文化への勉学に関して、外国語の授業の履修者と比べ、異文化関連の授業の履修者とイベントへの参加者も少なく、海外経験に乏しく、その経験も短期的なものであることが確認できた。

上述の意識と行動を比較すると、大学生の平和に対する意識と実践の間の大きな差が確認できた。異文化理解に対する関心度と具体的な行動（例えば海外に関する情報のアクセスなど）との間、また異文化への勉学の意欲と行動（例えば異文化関連の授業の履修・イベントの参加など）との間に一定の関連性があるものの、顕著なズレも（意識＞行動）存在していることが明らかとなった。

さらに大学生の世界平和と異文化理解への日常的関心度は、本人の異文化への勉学の意欲と、実際に大学などでの関連学習状況及び家庭環境に左右されている。また、異文化への勉学の意欲には、本人の国際的志向と、実際の異文化あるいは関連情報へのアクセス状況、そして普段の周囲の違い（国内を含む）に対する受け入れの姿勢に左右されていることが明らかとなった。

7.2 考察

本研究で新たに得られた知見として、下記の4点があげられる。

第1に、外国人のみならず、周囲にある考え方の異なる人や苦手な人の受容は、世界平和と異文化理解への日常的関心度や異文化への勉学意欲とは無関係ではないことである。自国と他国という異文化に対する二分法的な捉え方であれば、身近に存在する異文化や多様性に気づかず、自分事として考えない、あるいは無関心な状態になってしまう可能性は否めない。異なる考えに対する受容や身近にある小さな違いへ対応の積み重ねは国際・グローバルなトラブルや課題への対応にプラスの働きを有しているといえる。すなわち、日常的にオープンマインドをもつことは世界平和と異文化理解に対する意識とつながっているのである。

第2に、大学における「異文化・国際・グローバル」関連授業は学生の意識に一定の影響を与えており、その教育的効果が認められたことである。また、関連授業の履修単位数の多い学生は限られていることから、世界平和と異文化理解への日常的関心度は全体として高くない結果につながったのであれば、教育プログラムの改善が求められる。今回の調査結果から、「異文化・国際・グローバル」関連授業の履修単位数が少ない（未履修者は約4割にも達している）ということも示された。おそらく異文化・国際・グローバルなどのテーマに関わる授業科目は自由選択科目にしている大学が多く、学生は履修しなくても卒業が可能になっているためである。関連科目を受講していない学生が一定数存在するのは看過できない問題だと考える。平和

な社会、多文化共生社会を実現するためには同年齢人口の半数を占めている大学生に対する異文化理解の教育は不可欠と考えられ、必修科目として一定数確保されるカリキュラムが構想されることで現状の改善が期待できる。

第3に、外国語教育はコミュニケーションの手段を習得するのみならず、外国文化の習得にもつながるとしばしば語られているが、今回の分析で外国語の履修単位数は異文化に対する勉学意欲へのプラスの効果が確認できなかったことである。一方、外国語が好きということは一定の影響をもっているという結果が得られたため、外国語に興味をもたせる工夫の余地が残されている。上述のように、異文化理解関連科目を必修科目にしていない大学が少なからずあるのに対して、外国語を必修科目にしている大学が多いというスキル涵養を重視する現状について、社会的ニーズと教育の観点からカリキュラムの調整を検討する必要があるのに加え、外国語教育の捉え方や教授法などの課題も示唆された。

第4に、海外情報へのアクセス（頻度）のような行動が、異文化への勉学意欲、世界平和と異文化理解への日常的な関心に影響を与えていることが明らかになったことである。その行動は学生自らのアクションである一方、大学教育の一環として授業の課題や推奨などに由来することも考えられる。意識から行動へという一方通行的な働きではなく、行動を通して意欲が高まったという双方向的な働きが確認できたため、大学教育の中でこのような行動を喚起したり、促したりするようなきっかけを提供することは効果的であると考えられる。

それに関連して、学生の意識と行動の間に生じているズレについても注目すべきである。意識があっても必ずしも意欲が高いとは限らない。また、例えば異文化関連のイベントへの参加や海外留学などの行動は経済的・時間的な制限を受けることも考えられる。大学から様々な機会を提供したり、イベントや実践的な学習プログラムを企画したりすることなどのきっかけをつくることによって、漠然とした意識をより積極的な興味・関心に変え、より主体的に行動するように変わることも期待できると考える。

8 おわりに

本研究は量的分析を中心に行ってきたが、調査サンプルに上位学年の学生数が比較的少ないこともあり、一定の限界もある。今後の課題として、行動も伴うような高い意識（積極的な関心）はどのように形成されるのか、どのような教育プログラムが積極的な関心及び積極的な行動を促すのかなどについて、質的分析を進めていきたい。

注：本研究はユーラシア財団の助成金によって行われた。ユーラシア財団、そして本調査にご協力いただいた先生方、学生の皆さんに、この場を借りて感謝の意を表したい。

参考文献

- 五井平和財団 2022「平和に関する世界の若者の意識調査－2021年度調査結果」
<<https://www.goipeace.or.jp/news/peace-survey2021/>> (2023/09/04 閲覧).
- 黄梅英・孟慶榮・森田明彦・張涛・穆紅・目黒恒夫 2015「グローバル社会における国際理解力の育成に関する研究」『尚絅学院大学紀要』69号 pp.113-128.
- 坂根シルッ 2019「グローバル教育における『異文化理解』の重要性：学生の意識調査から見える『異文化』とは」『紀要 VISIO : research reports』49号 pp.79-87.
- 三田ユネスコ協会 n.d. 「ユネスコ憲章 (全文)」
<<https://www.unesco.or.jp/sanda/kensho/>> (2023/09/04 閲覧).
- 沼田潤 2009「日本の教育政策における異文化理解の位置づけ：問題点と今後の方向性に関する考察」『評論・社会科学』88号 同土社大学社会学会 pp.193-225.
- 沼田潤 2010「日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査：異文化理解の意識に関わる諸要因の基礎研究」『評論・社会科学』91号 同土社大学社会学会 pp.169-186.
- 沼田潤 2012「日本人大学生における異文化理解の現状」『人間環境学研究』10巻2号 pp.55-63.
- 広島市教育委員会 2016『「平和に関する意識実態調査」調査報告書』
<<https://www.city.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/53524.pdf>> (2023/09/04 閲覧).
- ヒロシマピースボイス 2022「学生平和意識調査」
<<http://www.pv-hiroshima-soka.jp/activity/survey/results-2022/>> (2023/09/04 閲覧).
- 村上登司文 2021「イスラエルの平和意識の考察：中学生に対する意識調査から」『広島平和科学』42巻 pp.17-37.
- 目黒恒夫・會澤まりえ・呉正培・黄梅英・孟慶榮・孫成志 2017「異文化コミュニケーションにおける大学生の自己開示に関する比較研究：日中韓大学生の比較を中心に」『尚絅学院大学紀要』74号 pp.45-61.
- 文部科学省 n.d. 「国際連合教育科学文化機関憲章 (ユネスコ憲章)」
<<https://www.mext.go.jp/unesco/009/001.htm>> (2023/09/04 閲覧).